

子どもにはチカラがある
～バングラデシュのストリートチルドレン～

関西学院大学 教育学部 教員
浜田進士

インドの東隣りに位置するバングラデシュの首都ダッカは 1300 万人もの人がひきしめあう世界でも有数の過密都市。路上で暮らす子どもたち＝ストリートチルドレンは 34 万人を越える。単に貧しさだけでなく、両親の離婚や暴力問題から家を出て、心の傷を抱えたまま路上へ流れてきた。路上ではおとなにだまされたり暴力を振るわれたりすることが多い。

私は 2 年に一度、10 名足らずの学生とともに、ストリートチルドレンの支援団体を訪ねる旅を実施している。ストリートチルドレンと交流しながら、農村でお茶をいただきながら、下痢で体調をくずして横になりながら、仲間と夜遅くまで語らいながら、学生は体験を少しずつ言葉にしていく。

バングラデシュの子どもたちと出会って、日本の経済的豊かさを再認識したことはもちろんだが、バングラデシュの子どもたちの持つ「チカラ」に心を揺さぶられていた。それは、知力や体力という「する」ことの「力」ではない。ここに「ある」(存在) ことから生まれる「チカラ」だ。ストリートチルドレンの「他者を受け入れようとするチカラ」「つながろうとするチカラ」「這い上がろうとするチカラ」だ。

ストリートチルドレンから、握手してもらい、抱きしめてもらい、背中にのっかかってもらうことで、「私たちは、受け入れられた」と学生は語る。私たちの生半可な知識や安っぽい同情では、子どもたちの屁のツツパリにもならないのに、子どもたちは「あなたは生きていいよ」というメッセージを「発信」している。路上生活で数々の性暴力を受けた少女は、「本当にやさしい人はだれなのか」を見抜いていた。慰めてほしいはずなのに、学生たちを慰めようとしてくれた。

「危険を冒してまで、なんでそんなところまで連れていくの？」と問われる。就職活動のために学生はますます内向きになっている。どんな学びも知識だけでは意味をなさない。排除され隅っこに追いやられた子どもたちとの生きた出会い、つながりがあって初めて学びに意味を持つ。子どもと接することで、自分の心にある「幸せの中の孤独感」「自分の闇の部分」に気づかされる。それは隠そうとしても隠すことはできない。バングラデシュと出会う学生を通して、私自身がもう一度学びなおしているのかもしれない。

以上